

平成24年度

中学生・高校生による 全国防災ミーティング in 東北 報告書

主 催：独立行政法人国立青少年教育振興機構

開催日：平成24年12月22日(土)～23日(日)

主管・会場：国立花山青少年自然の家

東北発 中学生・高校生による共同防災宣言

揺れる大地、迫り来る大きな黒い壁。

一寸先は闇。どんな災害が起こるかもわからない。

一人では打ち勝つことのできない大きな闇に飲み込まれてしまうこともあった。

だが私達はその闇の中

震災の辛さを世界中の人々と共有出来たから

大切な人がそばにいてくれたから

団結・協力し、痛みを分かち合い 小さな光を見つけ出すことができた。

今、その小さな光を頼りに暗闇の中を一步、また一步と着実に進んでいっている。

同世代、次の世代、千年後のため

一人でも多くの人に地震の恐ろしさを、

あの惨劇を、風化させることなく知ってもらわなければならない。

すぐには出来ないかも知れない。

しかし 一人から二人、二人から四人

親から子へ、子から孫へ

少しずつゆっくりでも伝えていくことができる。

今日私達はその発信者になることができた。

私達はこの先 震災の真実

震災での教訓

震災への思いを 全国、全世界へと発信していくことを宣言する。

WE WILL CHANGE !!!

2012年12月23日

平成24年度

中学生・高校生による全国防災ミーティング in 東北 報告書

目次

東北発 中学生・高校生による共同防災宣言

目次	1
前年度(平成23年度)淡路での開催	2
開催に至るまでの道のり ～邁進する石巻好文館高等学校～	3
中学生・高校生による全国防災ミーティング in 東北 プログラム	4
参加校一覧	5
中学生・高校生による全国防災ミーティング in 東北 開催	
基調講演・パネルディスカッション	6
分科会	7
緊急！討議	12
全体会	13
東北発 中学生・高校生による共同防災宣言採択に向けて	14
総括	15

資料

参加者アンケート結果

開催要項

高校生による全国防災ミーティング2012

ここがスタート 広げよう！学生たちの防災の輪
～未来のために共に学ぼう～

主 催：独立行政法人国立青少年教育振興機構

開催日：平成24年2月4日(土)～5日(日)

主管・会場：国立淡路青少年交流の家

採択された世界防災宣言

災害は私たちに大きな痛みをもたらします。
しかしたった一人で痛みを抱えて耐えるのではなく、
それぞれが持つ思いを伝え合い、共有し、行動に移す
ことで、次の災害に備え、命を守ることに繋がれると
思います。

今日この日、17年前に震災が起こったこの地で、
私たちは新しい一歩を踏み出しました。

来年はこの集いを東日本へとつなげ、
全国の人々が共に災害の教訓を胸に刻み、
命の大切さを考える場にしたいと思います。
そして将来、この集いが世界の人々を繋ぎ、
新しい防災の道を拓くことをめざします。

分科会テーマ

第1分科会：災害に強い町作り～私たちが考える防災体制～

第2分科会：省エネは東北真に関係しているか～支援の本質を考える～

第3分科会：ボランティア～若者にできる支援のかたち～

第4分科会：3.11の記憶～どう残し、どう伝えるか～

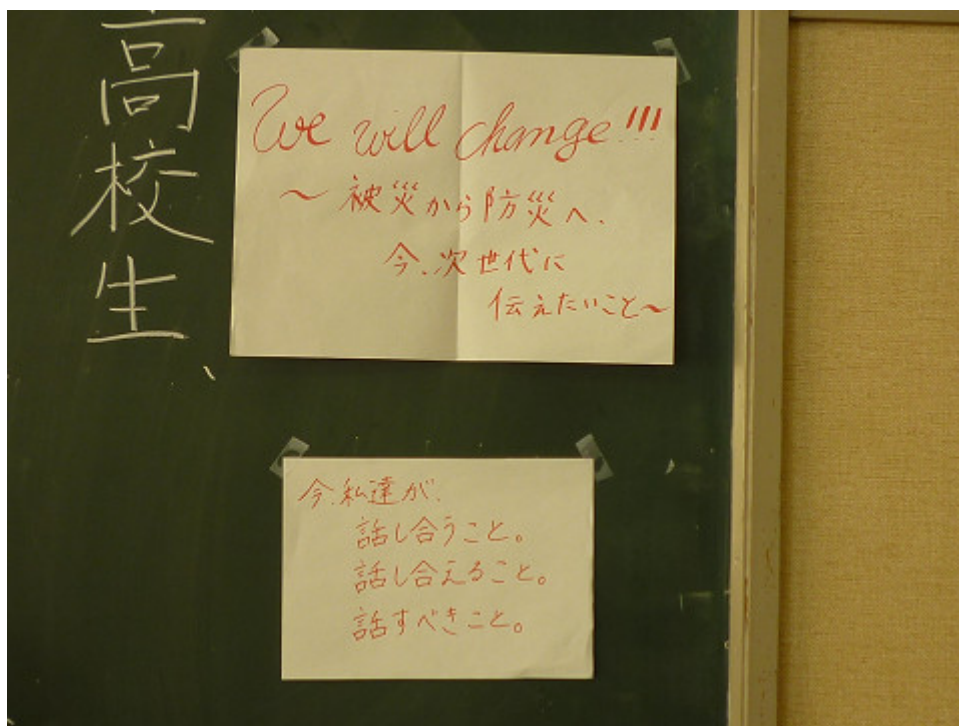
第5分科会：防災の大切さ～被災体験の地域差と未来につながる伝え方～



前年度からのバトンを受け取った石巻好文館高等学校の生徒たちは、東北での全国ミーティング開催に向けて打ち合わせを重ね、テーマや分科会の内容について決めていきました。

自分たちの言葉で、

自分たちが伝えたいことを…



We will change !!!

～ 被災から防災へ 今、次世代に伝えたいこと ～

オープニングセレモニー

開会宣言	宮城県石巻好文館高等学校生徒
主催者挨拶	国立青少年教育振興機構 理事 澁谷 健治
励ましの言葉	宮城県教育委員会 教育長 高橋 仁 様 (代理 教育次長 熊野 充利 様)

基 調 講 演

「自然災害との向かい合い方を考える」

講師 群馬大学大学院工学研究科 教授 片田 敏孝 氏

パネルディスカッション

コーディネーター	東北福祉大学	教授	数見 隆生 氏
パネリスト	文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課	安全教育調査官	佐藤 浩樹 氏
	兵庫県立舞子高等学校	環境防災科長	諏訪 清二 氏
	宮城県立光明支援学校	教諭	山口 裕之 氏

3.11の記憶 写真発表 宮城県石巻好文館高等学校生徒

分 科 会

第1分科会	震災の経験を伝える(高校生)
第2分科会	今必要なものとは(高校生)
第3分科会	デマに踊らされないために～正確な情報と知識を～(高校生)
第4分科会	いかにして自分の命を守るか(中学生)
第5分科会	災害時に役立つ支援とは～自分たちで用意しておける物～(中学生)

分科会報告

全体会

「東北発 中学生・高校生による共同防災宣言」

エンディングセレモニー

開 会

総 括

～全国防災ミーティングから世界防災ミーティングへ～

閉会の挨拶 国立花山青少年自然の家 所長 増川 敬祐

No.	学校名	参加人数
1	宮城県仙台西高等学校	5
2	宮城県亘理高等学校	5
3	宮城県石巻好文館高等学校	16
4	宮城県水産高等学校	5
5	宮城県石巻西高等学校	3
6	宮城県古川黎明高等学校	6
7	宮城県気仙沼向洋高等学校	5
8	宮城県登米高等学校	2
9	宮城県岩ヶ崎高等学校	5
10	宮城県一迫商業高等学校	5
11	岩手県立宮古工業高等学校	6
12	岩手県立大船渡東高等学校	5
13	岩手県立大槌高等学校	6
14	福島県立いわき海星高等学校	5
15	兵庫県立舞子高等学校	8
16	兵庫県立伊丹高等学校	2
17	兵庫県立尼崎西高等学校	1
18	兵庫県立農業高等学校	1
19	兵庫県立西脇北高等学校	1
20	兵庫県立瀧野北高等学校	1
21	兵庫県立但馬農業高等学校	1
22	兵庫県尼崎市立城内高等学校	1
23	兵庫県神戸市立神港高等学校	2
24	滋賀県立彦根工業高等学校	2
25	岡山県立真庭高等学校	3
26	和歌山県田辺市立新庄中学校	3
27	兵庫県相生市立矢野川中学校	3
28	宮城県女川町立女川第一中学校	7
29	宮城県登米市立登米中学校	4
30	宮城県栗原市立築館中学校	4
31	宮城県栗原市立高清水中学校	6
32	宮城県名取市立閑上中学校	6
33	宮城県石巻市立北上中学校	4
34	宮城県東松島市立鳴瀬第二中学校	4
35	宮城県気仙沼市立鹿折中学校	5
36	岩手県金ヶ崎町立金ヶ崎中学校	4
37	岩手県大船渡市立第一中学校	4
(一般参加)		
38	宮城県角田市立北角田中学校	1
39	宮城県南三陸町立伊里前小学校	2
40	宮城県大崎市立古川第三小学校	1
41	宮城県志津川高等学校	1
42	その他(教育委員会、NPO団体)	3
	合計	164



基調講演

「自然災害との向かい合い方を考える」

群馬大学大学院工学研究科 教授 片田 敏孝 氏

「津波自体は、ひとつの自然現象で想定の内」

「命を守り抜く津波てんでんこ」

「助けられる人から助ける人へ」

「率先避難者たれといった避難3原則」

「マニュアル的に対応する姿勢ではなく、そのときの最適な手段は何だろうと考えさせ、危機に向かい合う姿勢を学ぶこと」

防災教育の枠を越えて、人として困難を乗り越えて強く生き抜いていくためにも大切なお話を、実践に即した言葉で、熱心に語っていただきました。

「地学を勉強する→まず相手(地震や津波)を知ることになる」、「経済の構造を知る→経済行動をじゃまさない」といったお話から、教科学習で学んでいることも、今回学ぼうとしていることにつながっていることを感じました。その一方で、中学生・高校生が日常で意識することの少ない「行政」といった視点からのアプローチもあり、社会の一員としての中学生・高校生への期待が伺えました。また、震災後多くの被災者に寄り添った経験からのお話や実際のエピソードについては、相手の気持ちになって考える、様々な立場の人の気持ちになる、ことの大切さを改めて実感する機会をいただきました。それは、当たり前のことが大切なこと、と諭されているように心に響きました。

コーディネーター	東北福祉大学	教授	数見 隆生 氏
パネリスト	文部科学省スポーツ青少年局学校健康教育課	安全教育調査官	佐藤 浩樹 氏
	兵庫県立舞子高等学校	環境防災科長	諏訪 清二 氏
	宮城県立光明支援学校	教諭	山口 裕之 氏



第1分科会「震災の経験を伝える」

□ 震災直後の経験を伝えよう。

- ・震災当時、震災から現在までの様子
- ・家や学校での生活、地域の状況
- ・被災地の写真、自分達の経験をまとめた文集、学校での取り組み、卒業後の進路など

☆被災地の中でも県・地域により被害や復旧に差がある



第1分科会「震災の経験を伝える」

□ 被災地と他地域の暮らしを知り合おう。

他地域からみた震災はどうだったのか

- ・当初は実感がない、現実味がない
- ・実際に現地に行って実感を持てた
- ・がれきの山にショックを受けた

第1分科会「震災の経験を伝える」

□ メディアは語れない

その時、その場所で起こった真実を伝えよう。

- ・ボランティアをする中でかけられた一言
- ・震災でみえた人間の本質
- ・震災当時の治安
- ・メディアによる情報と自分達の経験とのズレ

☆震災の遺産を残していくかどうか



第2分科会

「今必要なものとは」

多方面から見るからわかる、
眼で見てわかる必要なもの

・震災直後に必要なものとして……

- ◎情報源として…ラジオ
- ◎電源の確保として…発電機、乾電池、手回しラジオ
- ◎防寒として…石油ストーブ、毛布、
- ◎食料品の備蓄…水、ウエットティッシュ
- 個人→防災グッズ 行政→避難所の充実(食料等)
- 地域→避難経路の確認

今、被災者への対応としてふさわしもの

- ・仮設住宅、せまい→空いている住宅の解放
- ・同情みたいに接してほしくない→言葉では簡単だが気持はちがう→普通に接してほしい
- ・被災者への精神的ケアが必要
- ・高齢者への定期的な話し相手(交流の場の設定)
- ・ボランティアの人が記念写真でピースや被災者へ写真を頼む

被災者への対応

- ・憐れみでなく、普通に接して
- ・土台の雑草の除草(ボランティアへ)
- ・福島の間評被害→安全な食べ物があるが売れない
- ・震災前の住宅の建設→土地や資金が大変だが
- ・文化祭での募金活動→直接被災地の東北へ
- ・避難所での幼児の遊び場の設置

復興に向け、他県や被災県に必要なもの

- ・地元の水産加工業者・養殖業者への支援→授業として
- ・地元の復興のために、地元で働く！！
- ・ボランティアを増やし、高齢者の話し相手になる
- ・劇やライブなどのイベントを行う

復興に向けて

- ・気仙沼→生活に困らないほど支援が(感謝) 少しずつ支援離れしてもいいのでは
- ・アメリカやドイツとの交流がある→世界との交流へ発展してほしい
- ・学校では5年間被災地訪問をし、状況を伝える
- ・郷土料理教室→高齢者講師→町の活性化へ
- ・福島の風評被害の払拭

復興に向けて

- ・鮭のまち復興作戦(宮古市)
- ・仮設住宅へ出向き、何をしてほしいのか
- ・被災者の話を聞き、伝える(兵庫)

まとめとして

- ・被災地の現状を伝える
- ・何が 필요한のかニーズにあったボランティア
- ・今日集まった、みんなのネットワーク
- ・全国へ発信！！



平成24年度中学生・高校生による
全国防災ミーティング in 東北

**第3分科会 「デマに踊らされないために」
(正確な情報と知識を)**

視点1：良い情報と悪い情報はどう見分けられよいか？

- インターネットやツイッター、ブログなどからの情報はウソが多く信用できない。
- 発信元が明確でないものは怪しい。
- チェーンメールでいろいろな情報がどんどん送られてきた。
- テレビは被害のほんの一部しか伝えていない。(すべては信用できない)
- ありもしないウワサに振り回された。

↓

○独断と偏見で判断するのではなく、より確かな情報を参考にする。



平成24年度中学生・高校生による
全国防災ミーティング in 東北

**第3分科会 「デマに踊らされないために」
(正確な情報と知識を)**

視点2：どうやって正しい情報を得られよいか？

- 正しい情報は自分で選択するしかないのではないか？
- 国や行政からの情報は遅いのではないか？
- 被災地は、電気も電話も使えない。ラジオや近隣のウワサぐらいしか情報源はない。生活が極限状態なので、デマでも信用するしかない。

↓

○自分たちで行動し、より正確な情報を得ていく。



平成24年度中学生・高校生による
全国防災ミーティング in 東北

**第3分科会 「デマに踊らされないために」
(正確な情報と知識を)**

視点3：もし、もう1回大きな地震が起きた時、私ならこう判断したい。

東日本の高校	西日本の高校
<ul style="list-style-type: none"> ○地震が起きる前に正しい情報を集めておくことが役に立つ。 ○ラジオや防災無線の情報から自分で判断し、最善の行動をとる。 ○あわてずに冷静に判断し、落ち着いて行動する。(周りに惑わされない) ○地震の強弱に関係なく、すぐに避難するよう意識を変える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○想定外のことを想定し、避難を促す。 ○地域での普段からの人間関係づくりが必要でないか。 ○まずは自分の身の安全を確保してから周りの人のための行動を起こす。 ○安全な場所に移動し、正しいと確信の持てる情報を発信していく。

私たちが伝えたいこと！

○独断と偏見で行動せず、より多くの情報を集め、本当に正しいと思う情報を参考にする。

○正しい情報かどうか自分たちで判断が難しいことは、国や政府、大人に訴えていく。

第4分科会

「いかにして自分の命を守るか」

石巻好文館高校
今野 佳奈、榛澤 志歩、大内 星奈

第4分科会「いかにして自分の命を守るか」

**災害が起きた時、まず何をすべきか。何が
できるか。どこへ逃げるか。**

*** まず何をすべきか ***

身の安全を確保。冷静になる。逃げ道の確保。

*** 何ができるか ***

避難の呼びかけ。励ましあう、ボランティア、
避難所で名簿を作る。

*** どこへ逃げるか ***

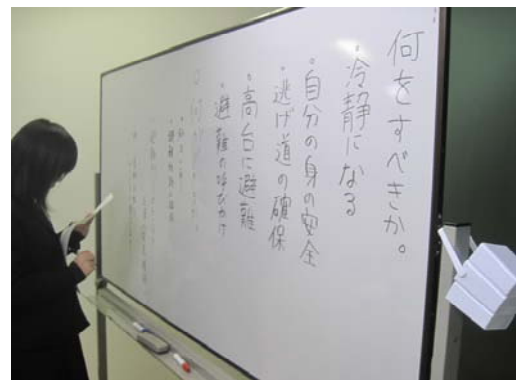
- ・指定避難場所(学校など)
- ・広い空き地
- ・物が落ちてこないところ
- ・建物が少ないところ
- ・海が近い場合は高台へ
- ・公園
- ・頑丈な建物
- ・家族で決めた場所 etc



第4分科会「いかにして自分の命を守るか」

被災場所の違いについて考える。

- ・通学中(街中)
- ・学校
- ・家
- ・店内
- ・一人である時
- ・友達といる時
- ・その他



第5分科会 報告

「災害時に役立つ支援とは」
～自分たちで用意しておける物～

自分たちで震災、災害を乗り越えるための準備物

- ① 防寒具・毛布(寒さを防ぐため)
- ② ラジオ(情報収集のため必要)
- ③ 水(停電、断水時に必要、水は命をつなぐ)
- ④ ライト(停電や夜の活動のため)
- ⑤ 食糧(簡単に利用できる・長持ち・生きるために必要)

マッチ・ライター 救急セット 電池 ひも マスク
発電機 タオル ガス 時計 簡易トイレ 自転車 靴

第5分科会 報告

自分たちが支援物資を送る側になったとき、被災地の人に快適に過ごしてもらえるように何を支援するか。

- ① 暖房・防寒用品(寒さを防ぐため、かわりがないから)
- ② 食糧(栄養をとるため、店が壊れて食料の調達困難)
- ③ 水(生命維持、手洗い)
- ④ 衣服(洗濯ができない、着替え、衛生)
- ⑤ マスク(病気の予防、がれき・砂ぼこりから守る)

雑誌 救急用品 ラジオ ガソリン おむつ 電池
ラップ 発電機 日用品 遊び道具 洗面用具
充電器 自転車 義援金 エチケットガム



「最初は、緊張したけど、いろいろ伝えることができて良かった。(14歳女子)」

シンボルとして残すべきか、残すべきではないか



石巻好文館高等学校 2年 葛岡 壮

「まだまだ時間はあるんですが、一旦意見が出尽くしたようなので、僕の方から聞きたいことがあったので、皆さんに聞きたいと思います。まずみなさんに想像して欲しいんです。津波が来ました、自分の地区に。津波の波だけでなく、大きなタンカーが陸に乗りあげてきました。家をなぎ倒しながら進んで来ました。そのタンカーは引き波で海に戻されることなく、そのままそこにあったり、病院の屋根の上にバスが津波で乗り上げたり、石巻のある小学校では津波の後、火災が起きて、一晩ずっと燃え続けてこなごなになったっていう小学校もあります。そういうようなことがもし自分の地区であつたら、(その状況で建物等を)残しておくべきかどうかってことを皆さんに聞きたいと思いました。」

残すべき

やっぱり震災の恐怖は残したほうがいいと思う。やっぱりこういうことがあったから震災は怖い、だから気をつけなければいけないと、震災に対して対応を考えなければいけないという意識が起きる(男子)

残していくっていう活動をするまでには、今生きてる人たちは気持ちも関わってくるが、はっきりいうと千年後の人たちは辛う辛ういう気持ちが津波を経験していないので、わからないので、それを映像とかで残すっていう意見があつたが、映像と本物を見るのでは迫力が変わってくると思う(女子)

次起きた時を考えない人が出てくるし、残すことで次起きた時の対応をどうしたらいいのかということを考える人が増えるらしいので、残したほうがいいと思う(男子)

残しておくべきではないと言つたが、正直中間派である。そのまま残すのではなく、兵庫県には綺麗なイルミネーションの施設があり、デートスポットになっている。それは震災の後にできたもので、東北地方でも県庁前とかに大きくそういうものを作って、そういうところにお金をかけて、こういうことがあつたからと誰でもみるようにしたらきっと気づいた人からやっついてひろがると思う(男子)

その地域にいる人の気持って大事だと思うが、そこが母校の人もたくさんいると思う。その人たちが帰ってきた時に学校が知らない間になくなっていくのは悲しいと思う。残しておくか残さないかと迷っているうちは話し合いができるが、なくなったら戻らなくなってしまふ。迷っているうちは残しておいたほうが、いいと思う(女子)

僕は残さないべきから残すべきに移動しました。今回の3.11も僕は全然関係ない、東北のことなんてわからない。だからそういうのを残すことによって、後の世代に伝えることの大切さ、今の世代でもわからない人がたくさんいると思うから、そういう人たちにもわかるようにしていったらいいと思うから、残しておいたほうがいいと思った(男子)

残すべきではない

自分はどっちかという考えではないという考えですが、土地に残さないだけで、映像とか写真に残して、その映像をDVDとかにして、次世代の子供達に小学校で見せたりして伝えられたらいいと思います(男子)

現地の人の生活のしやすさが第一かなと考えていて、自分は現場を見ていないからわからないが、過ごしやすさや思い返す気持ちを考えると残すべきではないと考えます。あと、後世に伝えるという意見もあつたが、まだあれから1年9ヶ月だが、まだ自分にとっては早いかなと、だから5年後、10年後、もう少しあとでもいいかなあとと思っています(男子)

残すという意見があつたが、毎日自転車で学校に向かう時に目にします。私はそれを見て、もう風景になっています。それでいいのでしょうか。実際は風景になってはいけないうではないかと思う。思い出すのは辛いと思う人もいると思うが、おとなになった時に子どもとかにいわなきゃいけない日があると思う。そういう時に伝えることが大事だと思う。風景になってはいけないと思う。なので残さなくてもいいのではないかと私は思います(女子)

さっき風景になってはいけないという意見はそれはもちろんで、共感している。日本は地震が他の国よりも多いのもわかっているし、地震が一回きただけで相当な人が亡くなる。神戸の震災の様子もちょっと見ただけで、それでも大変で地震が起きたときはこころと伝言されている。なので、実物を見ると記憶よりも迫力は違うが、残さなくても地震の怖さは十分わかると思う(女子)

私は残すべきから残さないべきに意見が変わりました。正直言って私の家は沿岸部から少し離れているので、被害は大きくなかったが、それでも一週間から二週間は生活が大変だった。今回 we will change ということで、地震の被害を忘れないのは大切だと思うが、防災にかえていくということは、大きなものを残さなくても、東北の人たちに大変だったという気持ちが残っていれば、記録だけでも次世代に伝えていけると思った(女子)

これを学校でやってほしい。持ち帰ってもらえたら嬉しいことだと思う(司会)



今回のこういう場や分科会をもってもらって、いろんな学ぶことがたくさんあったと思うし、この会に参加してよかったと思います(男子)

昨日から今日の話し合いをとおして、やっぱり被災した側とそれ以外の方の意識が違っていてことを改めて知ることが出来ました。やはり被災した経験がない人は見ただけや聞いただけではわからないと思います。こういう場で話し合うことは大切だと思うので、次やるときはもっと被災者の言葉に耳を傾けてあげられるような話し合いになるといいと思いました(男子)

自分は最初乗り気ではなかったですが、女川とか、古川、被災者の人でもいろんな考え方があるというのを感じたのと、近畿地方の方からみた考えとかいろんな意見を聞いて自分の学校に戻っても生かせる内容だったと思うので、とてもいい防災ミーティングだったと思います(男子)。

昨日今日にかけて各分科会で話し合ってきたことを、マスメディアからは得ることができなかった現地の人の声を聞くことができているいろいろな感情を持つことが出来ました。いろんな分科会で話し合った内容には答えが出ないことがあって、もどかしくこのままでいいのかなぁという気持ちもいっぱいでした。自分の中でもそういったものも探求していきたい。答えを見つけるためにもっとみんなで話し合っていきたいと思うので、学校にもどったら話を聞いてもらって、全校生徒からも意見を聞いて、またこのような場で皆さんと話したいと思いました(男子)

やっぱり、この花山ということで、各学校を代表、選抜されてきた人が集まっているということで、分科会や先生の講演についても活発に意見を出していただいたので、選抜された良いメンバーだと思った。こういう機会を生かしてこれからの学校生活とか防災を考える糧にしてもらえればと思います(全体会司会)



もう少し時間が欲しかったです(16歳女子)

「宣言の中に次の世代のためにと書いてありますが、昨日の話し合いで、同世代にも伝えないといけないと思いました。また、次の世代という言葉も大事ですが、私たちは学校で千年後のひとの命を守るために防災活動をしています。次の世代という言葉とともに、同世代、千年後という言葉もぜひ入れて欲しいと思います(中2女子)。」

この意見が、満場一致で部分変更されました。

東北発 中学生・高校生による共同防災宣言(案)

揺れる大地、迫り来る大きな黒い壁。

一寸先は闇。どんな災害が起こるかもわからない。

一人では打ち勝つことのできない大きな闇に飲み込まれてしまうこともあった。

だが私達はその闇の中

震災の辛さを世界中の人々と共有出来たから

大切な人がそばにいてくれたから

団結・協力し、痛みを分かち合い 小さな光を見つけ出すことができた。

今、その小さな光を頼りに暗闇の中を一步、また一步と着実に進んでいっている。

同世代、次の世代、千年後のため

一人でも多くの人に地震の恐ろしさを、

あの惨劇を、風化させることなく知ってもらわなければならない。

すぐには出来ないかも知れない。

しかし 一人から二人、二人から四人

親から子へ、子から孫へ

少しずつゆっくりでも伝えていくことができる。

今日私達はその発信者になることができた。

私達はこの先 震災の真実

震災での教訓

震災への思いを 全国、全世界へと発信していくことを宣言する。



WE WILL CHANGE !!!

2012年12月23日

今年の2月4日・5日の2日間にわたり、国立淡路青少年交流の家を会場に、「ここがスタート 広げよう！防災の輪 未来のために学ぼう」をメインテーマに、第1回目の「高校生による 全国防災ミーティング」が開催され、「世界防災宣言」を採択しました。

それを受け、今回は第2回目として、会場を東北の、ここ国立花山青少年自然の家に移し、開催することができました。

遠くは兵庫県を中心に、近畿地域から中学生や高校生の仲間が、東北地域からは、岩手県や福島県をはじめ、宮城県内からも多くの仲間が駆けつけてくれました。

私達、石巻好文館高校の生徒14名も、3.11東日本大震災の記憶と様々な想いを胸に、「いつまでも被災者ではられない。意識を変えて前に進もう。防災を進めていく主体者になっていこう。私達よりも年下の人たちを『次世代』とし、その人達に何を伝えたいのか。何が伝えられるのか。何を伝えるべきか、みんなで話し合おう。」と考え、メインテーマ「We will changel!!! ～被災から防災へ 今、次世代に伝えたいこと～」として、9月から準備を行ってきました。

昨日は、1日目のプログラムを行いました。片田先生の基調講演「自然災害との向かい合い方を考える」、から始まり、数見先生、佐藤先生、諏訪先生、山口先生によるパネルディスカッションでのお話をうかがい、分科会で各テーマに沿った意見交換を行いました。内容は先ほどの各分科会からの報告にありましたとおり、それぞれに想いのある前向きな意見交換が行われました。

2日目の今日は、各分科会ごとに報告を発表し、全体会において、「私達が将来に向けてどう進んでいったらよいか」について、各自が得た考えを発表していただきました。そして、皆さんのご協力のもと、「東北発 中学生・高校生による共同防災宣言」を採択することができました。

私達は、18年前に起こった「阪神淡路大震災」から見事に立ち直った近畿地域からの仲間と共に、この宣言を全国、そして世界の人々に対して発信し、次世代と共に、次に来る災害に備えていきます。それは、東日本大震災での被災者としての意識を「change!」して、前を向いて次世代と共に大きく成長することで、できることだと思います。

「被災から防災へ そして世界へ。」この言葉を主体的に進めていくのは私達と次世代です。

会場の皆さん、2日間本当にお疲れ様でした。私達は皆さんと共にこれからも一緒に歩んでいきたいと考えています。

来年予定している「世界防災ミーティング」で、またお会いしましょう。ありがとうございました。



資料

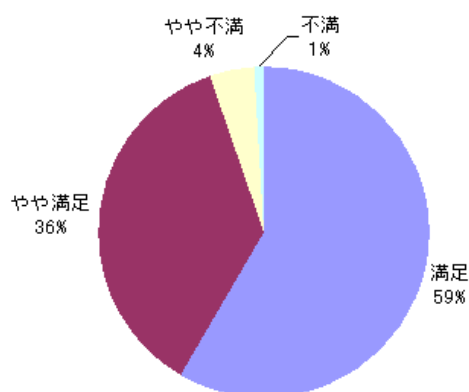
参加者アンケート結果

開催要項

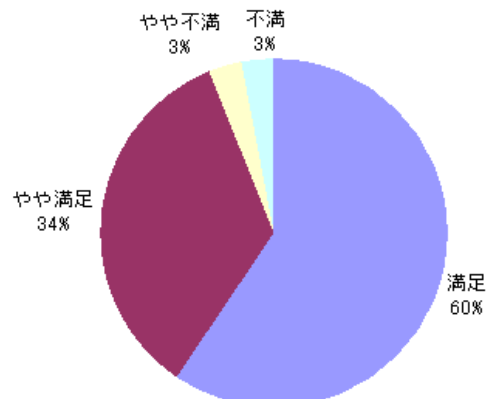
参加者アンケート結果

「事業全体をとおしてはどうでしたか」

〔生徒〕



〔引率教諭〕



- ・それぞれで考えが違っていることに驚きました(17歳男子)
- ・自分の町の復興に関して、役に立つことが多かった(17歳女子)
- ・最後の意見交換の時に自分の考えを伝えられなかった。伝えることに夢中になりすぎて伝える側の自己満足になってしまっている部分があった。普段交流のできない遠い地域の人たちと交流することができ、様々な地域の状況を知ることができた。震災は多くの傷を残したが、今日のような場面は震災がなければ集まることもなかった(17歳男子)
- ・自分が思った意見でも、他の人は違った意見を考えていて、様々な人の考えを聞くことができたので参加して良かった(13歳女子)
- ・もう少し全体で話し合う時間が欲しかったです(16歳女子)
- ・他の地域に住む同年代同士で、それぞれの思いや考えをシェアし合うことはとても意味のあることだった。私は内陸部に住んでいるので、実際の被害などについてはどうしても聞く側になってしまったが、「知る」ことができて本当に良かった(17歳女子)
- ・震災について忘れていたことや、大切なことを全国のみなどと共有し語り合えて良かった(18歳男子)
- ・もう少し一人一人が意見を言うべき(17歳男子)
- ・震災のことなど、みんなと意見を交換できて、自分以外の思いも聞けたので、とても良い機会だった。でも、本当のこと正論を言って欲しい。間違っているわけではないけど、違うところもある(14歳女子)
- ・石巻好文館高等学校の人たちはとても頑張ったと思った(16歳女子)
- ・初めて参加して、自分は勉強不足だと思いました。今回聞いた話を、学校や地域の人たちにわかりやすくしていきたいです(16歳女子)
- ・第1分科会に参加して、他の地域の現状や、震災時のことを聞いて、そのことを地元の復興に役立てていきたいと思った(18歳女子)
- ・まず、参加者の意識の高さに驚かされています。自分も変わっていかないと！とすごく思いました。兵庫から来るかがありました(16歳女子)
- ・“本当の声”(ボランティアに対してなどの)をきけて、すごくためになりました(17歳女子)

- ・学校の防災担当が参加すべき、引率教員が1名だと学校によっては生徒会のみとなる場合がある。学校全体の防災に関わる人の意識を変えることが一番大事(30代男性)
- ・このような事業を被災三県でまわしながら数年続けること(60代男性)
- ・講師の先生の話より生徒同士の話を多くすべきである(50代男性)
- ・開催時期や日数など検討の必要があると思う。生徒たちは大変立派。分科会のテーマ、進行、時間なども検討が必要(30代男性)
- ・講話、パネルディスカッション等、貴重な講演を聴くことができて良かった。石巻好文館高等学校はじめ、高校生の活躍が中学生にとって良い刺激になった(20代女性)
- ・子どもたちがもっとじっくり話し合える時間が欲しかったです。1日目のパネルディスカッションを被災した生徒と阪神の生徒がすることで、本ミーティングのねらいに迫ることができたのではないかと思います(40代男性)
- ・石巻好文館高等学校の生徒がよく頑張ってくれたと思います。中学生、高校生が話しやすくする工夫に感心しました(特に第4、5分科会)(20代男性)
- ・生徒の運営準備には時間が必要で、校内の分科会の実践などを通して運営に生かせるように取り組む必要がある(40代男性)
- ・みんなで話し合う良さを感じることができたと思う。さらにすすめるためには分科会での話し合うスキルをもっと指導すべきだと思う。ペア、グループを上手に使い、一人一人の思いを出し交流できるようにさせてあげたい。ファシリテーションしていた高校生のみなさんがとても頑張っていたのがすばしかったです(40代男性)
- ・もっと生徒がうち解けてからミーティングに入った方がよかったです。ゆっくり交流する時間が欲しい。(20代女性)
- ・今後も継続しなければ…次世代に引き継ぐ必要があると感じました。(50代男性)
- ・東北の宮城で、しかも花山で開催されたことはとても意義のあることだったと思う。宮城岩手の内陸地震と三陸の津波で大きな自然災害をこの何年かで受けた地で、防災ミーティングが実施できたことは良かった。この地から宣言を発信できたのも良い。(60代男性)

We will change !!!

～ 被災から防災へ 今、次世代に伝えたいこと ～

平成 24 年度「中学生・高校生による全国防災ミーティング in 東北」開催要項

- 1 趣 旨
平成 24 年 2 月に、3.11 東日本大震災で被災した東北地方の高校生や関西地区の高校生が会し、「高校生による全国防災ミーティング 2012」を開催した。参加した高校生は世界防災宣言を採択して、内外に向けてメッセージを発信した。
また、今年度、全国の小中高校においては新たに各学校毎の防災計画の策定作業にとりかかり、災害時の安全確保に全力を注いでいる。
そのような中、被災地となった東北地方や今後の地震災害が想定されている地域で防災学習に取り組む、中・高校生が会し、「防災活動」や「災害の教訓」「災害に負けないまちづくり」をテーマに話し合い、防災意識と社会参加意識のさらなる向上をはかる。
また、話し合いの成果を「東北発 中学生・高校生による共同防災宣言」として内外に発信する。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 3 主 管 国立花山青少年自然の家
- 4 後 援 岩手県教育委員会、宮城県教育委員会、福島県教育委員会
- 5 協 力 国立岩手山青少年交流の家、国立磐梯青少年交流の家、
国立淡路青少年交流の家、国立那須甲子青少年自然の家
- 6 日 時 平成 24 年 12 月 22 日（土）～ 23 日（日）
- 7 会 場 国立花山青少年自然の家
宮城県栗原市花山字本沢沼山 6 1 - 1
- 8 講 師 (1) 基調講演 群馬大学大学院 教授 片田 敏孝 氏
(群馬大学広域首都圏防災研究センター長)
演題 「自然災害との向かい合い方を考える」

(2) パネルディスカッション
コーディネーター 東北福祉大学 教授 数見 隆生 氏
パネリスト① 文部科学省スポーツ青少年局学校健康教育課
安全教育調査官 佐藤 浩樹 氏
パネリスト② 兵庫県立舞子高校環境防災科長 諏訪 清二 氏
パネリスト③ 宮城県立光明支援学校 教諭 山口 裕之 氏
- 9 参 加 校
【高等学校】
宮城県石巻好文館高校、亘理高校、仙台西高校、宮城県水産高校、石巻西高校
気仙沼向洋高校、古川黎明高校、岩ヶ崎高校、一迫商業高校、登米高校
岩手県立宮古工業高校、大槌高校、大船渡東高校
福島県立いわき海星高校
兵庫県立舞子高校、兵庫県立伊丹高校、兵庫県立尼崎西高校、兵庫県立農業高校
兵庫県立西脇北高校、兵庫県立龍野北高校、兵庫県立但馬農業高校、尼崎市立城内高校
神戸市立神港高校、滋賀県立彦根工業高校、岡山県立真庭高校

【中学校】

宮城県女川町立女川第一中学校、気仙沼市立鹿折中学校、登米市立登米中学校
名取市立関上中学校、石巻市立北上中学校、栗原市立築館中学校、栗原市立高清水中学校、東松島市立鳴瀬第二中学校
岩手県金ヶ崎町立金ヶ崎中学校、大船渡市立第一中学校
和歌山県田辺市立新庄中学校、兵庫県相生市立矢野川中学校

10 参加人数 各校 引率教諭1名 生徒4名程度 計150名
一般参加（基調講演及びパネルディスカッションのみ参加）50名

11 日程

(1) 平成24年12月22日（土）

オープニングセレモニー	14:00～14:10
基調講演	14:10～15:00
パネルディスカッション	15:10～16:40
夕べのつどい	17:00
夕食	17:30～18:30
分科会	19:00～21:00

(2) 平成24年12月23日（日）

起床・清掃	6:30
朝食	7:20～8:30
部屋点検	8:30～8:50
分科会報告及び全体会 「東北発 中学生・高校生による共同防災宣言」	9:00～11:00
	11:00
エンディングセレモニー	11:15

12 分科会テーマ

今、私達が
「話し合うこと。」 「話し合えること。」 「話すべきこと。」

- | | | |
|-----------|---------------------------------|-----|
| (1) 第1分科会 | 震災の経験を伝える | 高校生 |
| (2) 第2分科会 | 今必要なものとは | 高校生 |
| (3) 第3分科会 | デマに踊らされないために
～正確な情報と知識を～ | 高校生 |
| (4) 第4分科会 | いかにして自分の命を守るか | 中学生 |
| (5) 第5分科会 | 災害時に役立った支援とは
～自分たちで用意しておける物～ | 中学生 |

13 参加費 1人 2,000円
(シーツ等洗濯費200円、食事費用1,600円、保険料200円)

* 参加校生徒及び引率教員の交通費は主催者が負担する。



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立花山青少年自然の家

平成25年1月発行

〒987-2593 宮城県栗原市花山字本沢沼山 61-1

【TEL】0228-56-2311 【FAX】0228-56-2469 【URL】<http://hanayama.niye.go.jp/>

体験の風を
おこそう